

ダンヌンツィオとパスコリのオデュッセウス像 ——詩人と教育者の立場の違い——

内 田 健 一

要 旨

序：ダンヌンツィオは『死の瞑想』（1912年）の中で、死んだパスコリとの関係を回想する。二人を繋ぐ重要な接点は、古代ギリシア神話の英雄オデュッセウスであった。そして二人には、詩人と教育者という立場の違いがあった。

第1章：両者の詩人としての連帯感は、ダンヌンツィオからパスコリへの好意・評価によって、次第に友情へと発展する。対極的な世界観を持つ二人ではあるが、ギリシア・ラテンの古典文学に対する情熱という固い絆で結ばれている。

第2章：パスコリは『オデュッセウスの眠り』（1899年）で、「眠り」を通じてオデュッセウスという神話的な人物像の消滅を、また「夢」を通じて祖国や家族への情愛を表現した。

第3章：学生用アンソロジー『敷居の上』（1899年）の「序文」でパスコリは、教育者としての熱意と、弱者を思いやる社会主義的な思想を語る。また「生徒たちへの覚書」で、オデュッセウスの涙を通して、郷愁や忠犬という純粋なものを若者に伝える。

第4章：オペラ作曲家ヴェルディの追悼演説（1901年）でダンヌンツィオは、エリート主義的でナショナリズムが濃厚な教育について論じた。晩年のヴェルディと、ダンテのオデュッセウスの老いた姿を重ね合わせ、学生に資本主義的な競争心を植え付ける。

第5章：詩集『マイア』（1903年）でダンヌンツィオは、英雄の個人主義を極限まで突き詰め、俗世を超越した孤高の求道者を描き出した。そこに利他的な教育者の要素が入り込む余地は全く無い。

第6章：詩『最後の旅』（1904年）でパスコリは、夢想を実現したいという強迫観念に取り付かれた英雄が、幾つもの幻滅を味わった末に破滅する姿を、悲哀を込めて描いた。ダンヌンツィオはこの作品を絶賛し、類似した内容の悲劇『愛よりも』を1906年に書いた。

結：ダンヌンツィオは、飽くなき探求心を抱く冒険者としてオデュッセウスを描き、自己を同一化する。この理想像は、詩人の立場でも教育者の立場でも同じである。一方、パスコリは詩人として、その神話の喪失を悲壮に描く。しかし、教育者としては、その悲劇には触れず、その純粋な詩情だけを強調する。ダンヌンツィオと違い、教育者の自覚を強く持っていたパスコリは、随筆『最後の授業』（1907年）で、彼が受けたカルドゥッチの授業（内容はダンテのオデュッセウス）を振り返りながら、詩と教育の一致という理想を夢見る。

キーワード：『オデュッセイア』、翻案、イタリア文学、詩、教育

序

1912年4月6日、パスコリ死去の報せを受けたダンヌンツィオは、追悼文を4回に分けて《コッリエーレ・デッラ・セーラ（*Corriere della Sera*）》紙に掲載した。その後、それらは『死の瞑想（*Contemplazione della morte*）』と題され、トレヴェス社から刊行された。その中でダ

ンヌンツィオは、パスコリとの最初と最後の対面を想起する。

1895年6月、二人が寄稿していた雑誌《コンヴィート (*Il Convito*)》の編集長デ・ボージスが口実を設けて、内気なパスコリをダンヌンツィオの家に連れて行った。初対面の様子を、ダンヌンツィオは次のように描写する。

私たちは共に健全で、詩への神聖な愛の純粋さを感じ、鍛練と孤独に立ち向かう準備ができていた。[...] 暗い力が私たちの深奥に充積していた。彼はまだ『饗宴詩篇集』を書かねばならなかった。そして私はまだ『讃歌』を歌わねばならなかった。(Ric.: 2125)

『饗宴詩篇集 (*Poemi conviviali*)』(1904年)と『讃歌 (*Laudi*)』(1903-04年)は二人の代表的な詩集であり、本稿の論題であるオデュッセウスが登場する。この古代ギリシア神話の英雄こそ、二人を繋ぐ重要な接点である。この場面の末尾は、「その後、私たちはオデュッセウスについて、そしてテイレシアースの予言について話した」(Ric.: 2126)という一節で締め括られる。

1910年3月4日、ダンヌンツィオはボローニャにあるパスコリの家を訪問した。この最後となる対面をダンヌンツィオは、「亡命者になろうとする者から、学校の鎖に縛られた者への、悲しい別れの挨拶」(Ric.: 2127)と表現する。当時、ダンヌンツィオは浪費癖のために膨大な借金を抱え、数週間後、フランスへ逃亡する。一方、パスコリは、国民的詩人カルドゥッチの跡を継いで、1906年からボローニャ大学の教授となっていた。ダンヌンツィオが何物にも縛られない詩人であったのに対して、パスコリは詩人であり同時に教育者でもあった¹⁾。

このように立場の違う二人が、作品の中で描き出したオデュッセウスは対照的である。それについて Stanford (1968: 208) は、「パスコリの直接の後継者の一人であるガブリエーレ・ダンヌンツィオは、最も激しくパスコリの雰囲気反抗した。パスコリの衰弱したニヒリズムから遠く離れた、活動的なものの具体像を、ダンヌンツィオはダンテのオデュッセウスの中に見付けた」と述べる。また Boitani (1992: 159) は、「パスコリが描くカリュプソー [オデュッセウスを愛した仙女] のニヒリスト的な唸り声が、終末へと向かう時代全体の嘆きであるなら、ダンヌンツィオの美辞麗句と生命讃美の中で、[オデュッセウスの]新しい神話が響かせたのは、その同じ時代の最高音のテノールの歌声である」と述べる。そこで本稿では、詩人と教育者の立場の違いという独自の観点から、年代順に、両者の非常に異なるオデュッセウス像の分析と比較を行う。

第1章 二人をつなぐ古典文学への情熱

本章では、両者がオデュッセウスを主題とするに至るまでの、芸術的・人間的な交流を年

代順に概観する。1887年11月、当時31歳のパスコリは、25部印刷した詩の小冊子のうちの1部をダンヌンツィオに送った²⁾。翌年2月、ダンヌンツィオは自分の詩が載った雑誌の切り抜きをパスコリに送り、4月7日にはパスコリの詩に関する評論『ソネットとソネット作者 (Sonetti e sonettatori)』を《トリブーナ (La Tribuna)》紙に発表した。当時、まだ25歳だったが、既に詩集や短編小説集を出版して有名だったダンヌンツィオは、ほとんど無名だったパスコリのことを「卓越した詩の作者」(SG I: 1114)と呼んで讃えた。

その後、ダンヌンツィオが長編小説や詩集を矢継ぎ早に出版する一方で、パスコリは1891年7月に22篇の詩からなる詩集『御柳 (Myricae)』を刊行し、翌年1月には50篇を付加して第2版とした。この『御柳』の書評を、ダンヌンツィオは1892年12月30-31日の《マッティーノ (Il Mattino)》紙に載せ、「古い形式に基づきながら、誰よりも見事に自分らしさを表現することに成功した、最も独創的な詩人」(SG II: 116)と、パスコリを高く評価する。

1894年5月の『御柳』第3版に収録された小品『コントラスト (Contrasto)』でパスコリは、自分とダンヌンツィオの詩法の違いを示す。ダンヌンツィオ的な作品は吹きガラスに喩えられ、作者は「私は芸術家だ」(Myr.: 215)と堂々と名乗る。それに対してパスコリ的な作品は丁寧に磨かれた宝石に喩えられ、作者は「私が何者であるのかは重要ではない」(Myr.: 216)と謙虚に言う。無名で寡作のパスコリが、外観ではなく内面を重んじる、自らの詩法の価値を自負していることが分かる。

1895年1月、雑誌《コンヴィート》が創刊され、ダンヌンツィオとパスコリはその中心的な役割を担う。前者は小説『岩窟の乙女たち (Le Vergini delle Rocce)』を連載し、後者は『アレクサンドロス (Alexandros)』などの詩を寄稿した。マケドニアの王の東征を描く『アレクサンドロス』は、幻滅と虚無をテーマとしており、後に『饗宴詩篇集』に収められる。同年6月には、序で述べたように、初めて両者の対面が実現する。

1896年9月26日、ギリシアを舞台とする悲劇『死んだ町 (La città morta)』を準備していたダンヌンツィオは、ソポクレスの『アンティゴネー』の翻訳に関する助言を求めてパスコリに手紙を送った。その中で、「最近、君は深くて忘れ難い音を見付けた。それは苦悩と恐怖の音だ。／しかし、できれば私は歓喜へ上昇する君を見たい」(CPD: 142)と書く。おそらくダンヌンツィオは、1896年8月9日の《マルゾッコ (Il Marzocco)》誌に載ったパスコリの詩『8月10日 (X agosto)』を読んだのだろう。1867年、パスコリが12歳の時、彼の父が何者かに銃で撃たれて殺された日を歌った詩の中で、地球は「この悪に満ちた暗い微粒子」(Myr.: 239)と表現される。一方、ダンヌンツィオは同時期の詩集『新しい歌 (Canto novo)』で、「歓喜を歌え！ 私たちの心から、／苦悩という灰色の服を遠ざけよう。／[…]/君に歓喜を、客人よ！ 私は／君に真紅の服を着せたい」(V: 163)と歌い上げる。

パスコリからラテン詩アンソロジー『エポス (Epos)』を贈られたダンヌンツィオは、1897年2月16日に礼状を送り、「これまで古代の詩の美しさが、より高貴な啓示者によって明らか

にされたことはなかった」(CPD: 143)と述べる。これは表面的な讃辞ではなく、ダンヌンツィオの蔵書の『エポス』には、エンニウスやウェルギリウスなどの部分に多くの書き込みがある。

1897年1月から4月にかけてパスコリは、《マルゾッコ》誌に『詩芸術論 (*Pensieri sull'arte poetica*)』を連載し、純粹無垢な子供らしさが詩には必要だと主張する³⁾。ダンヌンツィオが貪欲な追求を理想と考えるのに対抗して、「強い詩情とは、自分を取り囲むものの中や、他人がたいてい蔑むものの中に詩を見付ける人のものであって、近くにそれが見付からず、別の所でそれを探そうと努力しなければならない人のものではない」(PPS: I 1197)と論じる。

同年8月下旬、ダンヌンツィオは地元アブルッツォ州のオルトーナから国会議員に立候補し、選挙区各地で演説を行った。その中で私有財産権について、パスコリ風の身近なものを話題にして、「農民たちよ、耕した畑を区切る生垣は美しく、天に守られている！ […] 耕した畑を区切る生垣のように生命力に満ち、侵しがたいものは、この世にわずかしかない」(SG II: 279)と説明する。それに対してパスコリは、8月30日の《トリブーナ》紙に『生垣 (*La siepe*)』と題する公開状を載せた。「生垣にまつわる君の言葉の何と気高く甘美なことか！ まだ私の心の中で響いている」(PPS: I 1419)と、一先ずは賛同するが、「生垣は神聖だ。 […] しかし、耕して種を播いた美しい畑の眺めを遮るほど、高過ぎてはいけない」(PPS: I 1420)と、その行き過ぎを警告する。そしてウェルギリウスの『牧歌』を話題にした後で、どのようにすれば人々が生垣に囲まれた小さな畑で、「静かだが怠惰ではなく、善良だが自由で、平凡だが幸福な」(PPS: I 1423)生活を送れるか、共に考えようと提案する。

以上、両者の交流をその端緒から約10年間にわたって概観した。これによって、まず両者の間に詩人としての連帯感があったことが分かる。それが次第に友情へと発展するのは、特にダンヌンツィオからパスコリへの好意・評価が大きく作用している。両者の思想や作風の違いを、パスコリは時に挑発的に作品の中で示すが、ダンヌンツィオはそれに反感を抱くことはない。対極的な世界観を持つ二人ではあるが、文学に対する情熱、特にギリシア・ラテンの古典文学に対する情熱という固い絆で結ばれている。このような二人が対抗意識を燃やしながらオデュッセウスを描くのは、ごく自然な成り行きである。

第2章 パスコリ『オデュッセウスの眠り』の喪失感と虚無感

オデュッセウスを主題とする作品を先に発表したのはパスコリの方であった。『オデュッセウスの眠り (*Il sonno di Odisseo*)』(以下、『眠り』と略す)が、1899年2月16日の《ヌオーヴァ・アントロジア (*Nuova Antologia*)》誌に掲載された(後に『饗宴詩篇集』に収められる)。この作品は7つの節(18詩行、各11音節)によって構成され、主に『オデュッセイア』第10巻28-55行に基づいている⁴⁾。そのあらすじは以下の通り。

風の王アイオロスの島を出発したオデュッセウスと部下たちは、9日間、昼も夜も船旅を続けた。船を進めるのに役立つ西風以外をアイオロスが革袋に閉じ込めて、船に括り付けてくれたので、無事に故郷イタケーの島が見える所まで来た。オデュッセウスは帆綱の操作を、部下に任せずに一人でしたので、疲れ切って、そこで眠ってしまう。部下たちはアイオロスの革袋の中には財宝が詰まっていて、オデュッセウスがそれを一人占めにするのではないかと考える。中を確かめるために革袋を開けると、閉じ込めていた全ての風が激しく吹き出して、船は沖へ流されてしまう。目覚めたオデュッセウスと部下たちが悲嘆に暮れているうちに、船はアイオロスの島に逆戻りする。

パスコリの『眠り』の第1節では、まずアイオロスの島からイタケーに向かって航海するオデュッセウスの船が描かれる。その後、「9日目の太陽が金のきらめきの中に／消えて10日目になると、／何か分らない黒いものが現れた。／雲か陸か？ 甘美な夜明けに負けて、／彼の重い瞼は閉じた。そして、遠く／オデュッセウスの心は眠りの中に沈んだ」(PC: 94)と、オデュッセウスに眠りが訪れる。

続いて第2節では、船から見えるイタケーの島の様子(山、川、畑、焚火の煙)が描写される。しかし、「オデュッセウスの心は眠りの中でたゆたい、／もうそれが見えなかった」(PC: 96)と結ばれる。原作でオデュッセウスは確かに祖国を見るが、『眠り』ではそれを見ることはない。

次の第3節では、部下たちが革袋について議論する一方で、船は更に島に近付き、豚飼エウマイオスが斧で木を切る音が聞こえる。しかし、「オデュッセウスの心は眠りに落ちて、／もうそれが聞こえなかった」(PC: 97)と、聴覚も眠る。なお原作では、忠実なエウマイオスの登場は、オデュッセウスがイタケーに帰還した後の第14巻冒頭である。パスコリは原作のエピソードを大胆に切り貼りする。

部下たちの議論は第4節でも続き、船はポルキュースの入江(原作第13巻97行以下)に近付く。その先にはオデュッセウスの屋敷が垣間見え、そこでオデュッセウスの貞淑な妻ペーネロペイアは機を織っている(原作第19巻141行以下)。しかし、「オデュッセウスの心は眠りの中をさまよい、／それが聞こえも見えもしなかった」(PC: 99)と、眠りの描写が繰り返される。

第5節で、部下たちが革袋を開け、風が吹き出し、船は港から沖へ流される。港には、檣に凭れて立つ息子テーレマコスがいて、その周りを愛犬アルゴスが走り回る。主人の匂いを嗅ぎ分けたアルゴスは、遠ざかる船に向かって吠えるが、なおも眠るオデュッセウスには聞こえない。原作でアルゴスが登場するのは、第17巻292行以下で、既に年老いたアルゴスは、主人に気付くものの動けずに、すぐに死んでしまう。

第6節では、遠ざかる船から、父ラーエルテースの農園が見える(原作第24巻203行以下)。そこには、オデュッセウスが幼い頃に父から貰った13本の梨の木と10本の林檎の木がある。

その木の下で鋏に凭れて立つラーエルテースが、突然の嵐に運び去られる船を見る。しかし、オデュッセウスが父を見ることはない。

最後の第7節で、船が風によって遠くに運ばれたところで、オデュッセウスは目を覚ます。彼は目を凝らして、焚火の煙、豚飼、父、息子、愛犬、妻を見ようとする。しかし、「何か分からない黒いもの（雲か陸か？）が、／堇色の海を逃げて行き、／そして遠くに消え去るのを／眠りから覚めたオデュッセウスの心は見た」（PC: 102）だけであった。

結局、オデュッセウスが見たのは第1節と第7節の「何か分からない黒いもの」だけである。眠ってしまったオデュッセウスには、本当に船がイタケーに近付いたのかどうか分からない。しかしこの作品には、あと少しでイタケー帰還という幸福が得られそうな時に、それが逃げ去るという、原作と同じ喪失感がある。それに加えて、イタケー帰還後の光景を夢として描くことによって、帰還という幸福そのものが夢に過ぎないのではないかと思わせる虚無感がある。この詩の中でパスコリは、「眠り」を通じてオデュッセウスという神話的な人物像の消滅を、また「夢」を通じて祖国や家族への情愛を表現している。

第3章 教育者パスコリとオデュッセウスの涙

パスコリが『眠り』を書いた背景には、同時期に彼が編集していた学生用アンソロジー『敷居の上 (Sul limitare)』がある。そこには『オデュッセイア』の他に、『イーリアス』、『アエネーイス』、『ロランの歌』、『神曲』、『狂えるオルランド』などの詩、そしてマンゾーニやバルゼットロッチの小説が収録されている。1898年秋の出版をパスコリは目指していたが、原稿が完成したのは翌年5月で、出版は10月だった。『オデュッセイア』はパスコリ自身の翻訳で、その経験が『眠り』の創作に活かされたのである。

このような読本をパスコリが制作したのは、序でも述べたが、彼の生業が教師だったからである。その経歴を以下に示す。1882年、マテーラの高校でギリシア・ラテン語を教え始める。1884年、マッサの高校に移る。1887年、リヴォルノの高校に移る。1894年、教職を免除されてローマへ行き、教育省のために教科書を作成する。1896年、ボローニャ大学のギリシア・ラテン文法の講師となる。1898年、メッシーナ大学のラテン文学の教授となる。『敷居の上』の出版はこの時期である。その後1903年、ピサ大学のギリシア・ラテン文法の教授となる。そして1906年、ボローニャ大学のイタリア文学の教授となる⁵⁾。

『敷居の上』の「序文」で、パスコリはまず題名の説明をする。それは『オデュッセイア』第10巻133行以下で、オデュッセウスの部下たちがキルケーの屋敷の「敷居の上」で、彼女の機織の音と歌う声を聞く場面に由来する。原作でキルケーは秘薬を使って人間を獣に変身させる魔女だが、パスコリは「獣を手なずける女神」(PD: 199)と好意的に解釈する。そして同じく好意的に、太陽神ヘーリオス、つまり光の娘である彼女が織る布を、古い知の縦糸に新し

い知の横糸を組み合わせた「人間の知」の布と見なす。

続けてパスコリは、キルケーが住むアイアイエー島に辿り着いたのがオデュッセウスの船だけだったことと重ね合わせて、学校に通うことができる生徒の「幸運」について語る。

他の人たちは幸運に見放された。彼らは希望を失い、波の上をさまよっている。糧を漕いで、無駄な努力をしている。つまり、生きるために働いている、ということだ。彼らの唯一の考えは、体力を回復して、無駄な努力に備えるために、少しのパンを手に入れることだ。いつもパンが手に入るとは限らない。そして、陸が見えることは決してない。光輝く陸には、肉体にとっての休息があり、精神にとっての喜びがある。その陸には「学校」があり、その陸には「科学」がある。そこで人間は自らの権利の中で最も神聖なものを獲得し、自らの義務の中で最も神聖なものを遂行することができる。その権利と義務は一つの硬貨で、そこには「知」の文字が刻まれている。(PD: 200-1)

パスコリの教育者としての熱意が表現された一節である。前半の、知を奪われた者への思いやりには、パスコリの社会主義的な思想がにじみ出ている⁶⁾。オデュッセウスは、アイアイエー島に着く前に、失った仲間思いを馳せて悲しむ。パスコリの琴線に触れるのは、そのような場面である。

次にパスコリは、「敷居の上」に立ち止まる者——『オデュッセイア』ではエウリュロコスだけだが、学校の生徒の場合は余りにも多い——を後押しする。敷居を越えて中に入らないのは、キルケーの歌声、つまり詩を聞かなかったからだと言ふパスコリは言う。原作に詳しい説明はないが、パスコリは詩の本質を次のように説明する。

詩とは要するに、リズムの良い言葉で、生き生きとしたイメージを呈示する、あの芸術ではない。それは、おそらく、善や、美や、真でもない！ […]それが偉大なのは、私たちが満足させてくれるものだからである。私たちの中の欲求は疲れを知らない。一つ喜びを得たら、またすぐに少なくともあと二つは欲しくなる。 […]詩はその早馬のような欲求にブレーキをかける。こうして君たちは一つの喜び、一つの家、一つの愛に留まることができる。(PD: 202)

教育者である前に詩人であるパスコリは、詩に絶対的な価値を置く。その詩は、ダンヌンツィオ風の音楽的・絵画的な詩、そして飽くなき欲望を讃える詩の対極である。それを生徒が聴こうとし、それを学校が差し出そうとすることから、パスコリの教育は始まる。「君たち、入りなさい。そうすれば彼女 [=キルケー] が君たちに、死者の国を訪れ、愛する人たちに再会する方法さえも教えてくれるだろう」(PD: 203) と、パスコリは生徒に呼びかける。確かに原

作で、キルケーはオデュッセウスに死者の国を訪れる方法を教える。そして彼は、会う必要があった予言者テイレシアースの亡霊だけではなく、死んだことさえ知らなかった母の亡霊にも会うことができた。

「序文」に続く「生徒たちへの覚書」からも、パスコリのオデュッセウス観が分かる。そこでパスコリは、『敷居の上』の収録作品のあらすじを述べる。『オデュッセイア』の部分では、エピソードや登場人物の名前——キコネス族、ロートパゴイ族、キュクローペス族、魔女セイレーネス、怪物のスキュレーとカリュプデイスなど——を列挙し、説明を加える。それらの中で、他よりも長い説明が二つある。一つはオデュッセウスと7年間同棲した仙女カリュプソーについてで、「オデュッセウスに不死を与えるべく、彼に永遠の衣を与える。彼は祖国（岩根こごしく、小さい）が恋しくて、毎日涙でその服を濡らす」（PD: 214）と書く。もう一つは20年振りのイタケー帰還についてで、次のように書く。

目覚めるが、そこが祖国だと気付かない。その後、乞食の身なりをして自分の家に近付いた時、息子にも妻にも気付かれなかった彼が、犬によって気付かれる。その年老いた犬は彼を見ると、最期とばかりに、耳を上げ下げし、尾を振る。そしてオデュッセウスは泣く。（PD: 214）

パスコリはオデュッセウスが泣く場面を特別に取り上げる。しかも「泣く」という言葉を段落の末尾に置いて目立たせる。前章の『眠り』の夢の光景（第2～6節）にも描かれていたが、郷愁や忠犬という純粋なものこそ、教育者としてパスコリがオデュッセウスを通して若者に伝えたかったものである。

第4章 「教育者」ダンヌンツィオと『神曲』のオデュッセウス

ダンヌンツィオがオデュッセウスについて本格的に論じるのは、1901年2月27日、オペラ作曲家ヴェルディの死後30日目に際して行った追悼演説においてである。フィレンツェ高等研究所の講堂が会場で、聴衆は若者だった。教育者であることを半ば強いられたダンヌンツィオは、演説を次のように始める。

ここに集まった君たち、若者よ、この厳粛な研究の場、精神への崇拜のための建物、教えと学びの園、毎日君たちの知性と意思によってイタリアの学問の尊い守護神への炎が燃やされている炉であるこの場所で、神聖な礼拝に列し、荘厳な儀式を行い、[ヴェルディの]高貴な姿に全員一致の祈りを捧げよう。（Ric.: 444）

ダンヌンツィオの教育はエリート主義で、ナショナリズムが濃厚である。したがって彼の思い描く教育者像は、むしろ政治団体や宗教団体の指導者に近い。事実、ダンヌンツィオの演説は、後に、ファシズムの指導者によって模倣された。

演説の中心となるのは、実はヴェルディではなく、ヴェルディの肖像を作った彫刻家ヴィンチェンツォ・ジェーミトである。作品制作のためにヴェルディを観察するジェーミトの目を、ダンヌンツィオは「君たち [= 会場の若者たち]」と同じように、貪欲で純粋」(Ric.: 444)と表現する。パスコリは「貪欲」を嫌い「純粋」を好んだが、ダンヌンツィオはその矛盾する二つを共存させてしまう。

1813年生まれのヴェルディの像を、1853年生まれのジェーミトが作ったのは、《アイーダ》を発表して名声の頂点にあったヴェルディが、ジェーミトの生地ナポリに滞在していた1873年のことである。ダンヌンツィオは当時のジェーミトを想像して、「ギリシアからカンパーニア [ナポリ周辺] へ移住した古代民族の一つから本当に生まれたような、驚異的な若者が活躍していた [...] ギリシアの最も美しい春の純真な活力が、彼の四肢を巡っていた」(Ric.: 445)と書く。ギリシア的というのは、ダンヌンツィオにとって最高の讃辞である。貧しかったジェーミトが飢えを凌ぐ様子も、「彼はギリシア人のように三つのオリーブと一口の水を糧にして生きることができた」(Ric.: 447)と描写する。そして最後には、ジェーミトを「ギリシア人の最後の子供」(Ric.: 449)と呼ぶ。この表現を、後年、ダンヌンツィオは詩集『アルキュオネー (Alcyone)』に含まれる『船の勝利の女神 (La Vittoria navale)』(1903年)で、自分自身を讃美するために用いる。

演説の結末部分でダンヌンツィオは、晩年でも衰えることなく創作を続けるヴェルディの姿と、ダンテが『神曲』地獄篇第26歌85-142行で描くオデュッセウスの老いた姿を重ね合わせる。トロイア戦争の木馬の計をはじめとする知略に長けたオデュッセウスは、『神曲』において、道徳や宗教に背いて知性を悪用した罪人として地獄にいる。ホメーロスの原典を知らなかったダンテは、キルケーの島を出発したオデュッセウスが故郷イタケーに戻らず、航海の果てに死ぬ物語を創作する。

息子への慈しみも、年老いた／父への敬いも、きっとペーネロペイアを／喜ばせるだろう
夫婦の愛も、／／世界を、そして人間の悪徳と美德を／知り尽くそうという、私の中に宿る／情熱には打ち勝つことができなかった。／／そうして私は、たった一隻の舟で、／私を見棄てなかった僅かな仲間たちと共に／大海原へと漕ぎ出した。(Inf.: 297-8)

地獄の炎に包まれたオデュッセウスは、このように自分の旅の始まりをダンテに語る。ダンヌンツィオは演説の中で、「大海原へと漕ぎ出した」の一行を引用し、「不屈の勇氣、行動への意思、未知に挑む欲求が、これほど雄々しく表現されたことはなかった」(Ric.: 450)と、共感を示す。

パスコリがオデュッセウスを通じて伝えようとした欲求の抑制、そして純粋な情愛を、ダンヌンツィオは完全に否定する。

その後、オデュッセウスは地中海を西に進み、「それより先へ人間が進まないよう、／ヘーラクレスが目印を付けた／あの狭い海峡」(*Inf.*: 298)、つまりジブラルタル海峡を越えようとする。そこで、仲間に対して有名な「短い演説 (orazion picciola)」をする。

兄弟たちよ、お前たちは百千の／危険を乗り越えて西の果てにたどり着いた。／最早ほんの少しの活動時間しか／私たちの五感には残されていないのだから、／太陽を追って、人のいない世界を／経験してみようではないか。／／自分の種族のことを考えてみたまえ。／お前たちは獣のように生きるのではなくて、／徳と知を追い求めるために造られたのだ。(*Inf.*: 298-9)

これを聞いた仲間たちは大いに興奮して、「無謀な飛行をする翼のように權を動かして」(*Inf.*: 299)、大洋を突き進み、最後は海の藻屑となる。ダンヌンツィオは、「自分の種族のことを考えてみたまえ」の一行を引用し、「それを考えてみたまえ、若者たちよ！ 今日ここで私たちが讃える偉人 [= ヴェルディ] は、ダンテ、レオナルド [= ダ・ヴィンチ]、ミケランジェロが出たのと同じ種族から出た」(*Ric.*: 451) と、オデュッセウスになりきって演説をする。オデュッセウスの言う「自分の種族」は「獣」ではない「人間」を意味していたが、それをダンヌンツィオは「イタリア人」に限定する。

このナショナリズムを除くと、ダンヌンツィオの学生へのメッセージとして残るのは、淘汰を経ながら無限の成長を目指す、いわば資本主義的な競争心である。それを強調して彼は演説を締め括る。

おそらく将来、君たちの幾人かは、栄光に満ちた作品を仕上げた後に、「もっと先へ」と繰り返して言うだろう。そしてより困難な仕事に取りかかるだろう。

君たち一人一人へ兄弟のように私が手を差し出し、澄んだ目の中に固い決意を読み取ることができれば良いのだが！

若者よ、君たちはイタリアの来たるべき春だ。私の信義、私の誠実、私の希望、それらが私をして、君たちの勝利の意思の伝令に相応しい者とするのである。(*Ric.*: 451-2)

ホメーロスよりもダンテに負うところが大きいダンヌンツィオのオデュッセウスは、弱者への配慮を欠いたエゴイストである。パスコリの利他的な、論し導く教師像とは、全く相容れない。ダンヌンツィオと若者は、師弟関係ではなく兄弟関係で結ばれており、将来のライバルとして対等なのである。ダンヌンツィオにとって教育とは、自ら学んで創造することであって、

決して他から教えられて服従することではない。

第5章 詩人ダンヌンツィオと孤高のオデュッセウス

ダンヌンツィオが自らの理想像としてオデュッセウスを十全に描き出すのは、1903年5月刊行の『マイア (Maia)』においてである。この詩集は、全7巻を計画していた『空と海と陸と英雄の讃歌 (*Laudi del cielo del mare della terra e degli eroi*)』の第1巻であり、8400詩行(400節、各21詩行)からなる『生ノ讃歌 (*Laus vitae*)』がその大半を占める。冒頭には『ブレイアデスと運命に (*Alle Pleiadi e ai Fati*)』と『お告げ (*L'Annunzio*)』が置かれる。

『ブレイアデスと運命に』は、ダンテの『神曲』と同じ詩形テルツァ・リーマで、内容は前章で見た地獄篇第26歌のオデュッセウスの場面を下敷きにしている。壮大な詩集の序文であるこの作品には、ダンヌンツィオの思想の根本が表明されている。

「必要なのは航海することだ。生きることは／必要ではない。」と言ったラテン人に／栄光あれ。全ての海で彼に栄光あれ！／ […] ／ラテンの血からペラスゴイ人の王に相応しい／言葉が生まれた。それは、聖なるダンテによって／大きな翼を与えられ、より力強く飛ぶ。(Maia: 3, 6)

「ラテン人」とは、具体的には古代ローマの将軍ポンペイウスであり、ダンヌンツィオは地中海全てを支配したローマ帝国を讃美することによって、実際にはその再興を目指す近代国家イタリアを讃美している。当時は帝国主義の時代であり、イタリアもアフリカなどで植民地獲得を目指していた。引用の後半は、古代ギリシアから古代ローマに移り、中世イタリアを経て現代イタリアへと繋がる伝統を表現している。「ペラスゴイ人」とは古代ギリシアの先住民であり、その王はオデュッセウスに他ならない。そして、ポンペイウスの言葉に相応しい彼の冒険は、中世イタリアの『神曲』で見事に描き出されたことによって、より大きな影響を後世に及ぼしているのである。

詩の後半では、海の断崖の上で難破船の舵と船首像を燃やし、その炎の中に『神曲』と同じようにオデュッセウスの霊が現れることを祈願する。そこで、オデュッセウスの人物像を明確にするために、対極的なイエス・キリストに呼びかける。

ガリラヤ人 [= イエス・キリスト] よ、／ダンテの火の中にいるイタケーの船乗りの王、／オデュッセウスよりもお前は劣っている。／／余りにもお前の言葉は弱々しく、／お前の行動は頼りない。強い者を鼓舞するのは、／軟弱な求婚者の喉を貫いたあの男だ。／／お前の港に沈む錨は、／私たちの役には立たない。運命の渦の中に／飛び込む者は、身の

安全を気にしない。／／眠らない精神を持つ彼は、未知の国々へ／船で旅をする。彼の心の深淵を掴む／ただ一つの錨、それは自分の力だ。(Maia: 5)

イエスが説くような愛と赦しではなく、憎しみと復讐がオデュッセウスの行動原理である。「求婚者」とは、オデュッセウスが不在の間に、彼の妻ペーネロペイアに言い寄った者たちで、家に戻ったオデュッセウスに皆殺しにされた。「お前の港」が意味する神の救済、広い意味での安楽を、オデュッセウスの信者である「私たち」は必要とせず、むしろ危険を自分から求める。パスコリがオデュッセウスの眠りや涙という受動的な面に注目したのと対照的である。そして、「眠らない精神 (spirito insonne)」という表現には、パスコリの『眠り』への対抗意識が感じられる。「自分の力」だけを信じるダンヌンツィオのオデュッセウスは、非情な個人主義者である。

同様のオデュッセウス像が『生ノ讃歌』でも描き出される。この長編詩は、1895年7月末から8月にかけてのギリシア周航を基にして書かれたものである⁷⁾。ダンヌンツィオ自身をモデルとする「私」と仲間たちの一行は、古代ローマのアッピア街道の終点を示す石柱が残る、イタリア半島南東端のプリンディジの港から出航する。現実にはガッリーボリの港からだったが、ダンヌンツィオはそれを改変して、古代文明を遡る理想の旅に仕立て上げる⁸⁾。

対岸ギリシアのイタケー島付近で、一人で船に乗って旅をするオデュッセウスが現れる。静かに帆綱を握って風を読む白髪の彼は、「偉大な心の／疲れを知らない力が、／全ての筋肉に漲っていた」(Maia: 53)と描写される。船の中には何もなく、唯一携えて来たのは求婚者たちを殺戮した「愉快な復讐の弓」(Maia: 54)だけである。望むならば家族と共に安楽に暮らすことができるにもかかわらず、彼は「容赦ない海に対して、／せずにはいられない苦労」(Maia: 54)を続ける。それを見た「私たち」は次のように叫ぶ。

「人々の王よ、城壁の／破壊者よ、全ての難所の／船乗りよ、お前はどこに行く？／どのような驚くべき危険に、／黒い船を導くのだ？／私たちは自由な人間だ。／お前が帆綱を握るように、／私たちは自分の命を手／握っている。／ [...] 死に至るまでお前に忠実な私たちを、／お前の船に乗せてくれ！」(Maia: 54-5)

この決死の覚悟を誓う叫びを、オデュッセウスは子供の戯言と見なして、振り向きもしない。そこで「私」が一人で叫ぶ。

「聞け、嵐の王よ！／ここにいる者の中で私が最も強い。／私を試してみろ。もしも私が／お前の大弓を引くことができたなら、／対等の者として私を連れて行け。／しかし、もしも引くことができなければ、裸にして／私を船首に突き刺せ。」(Maia: 56)

この過剰なまでの自信に溢れた叫びに対して、ようやくオデュッセウスは振り向いて、眼光鋭く「私」を見る。その後、オデュッセウスは「私」に対して何もせず、何も言わず、ただ帆網を握りながら海の彼方へ去っていく。詩人ダンヌンツィオは、オデュッセウスの個人主義を極限まで突き詰め、俗世を超越した孤高の求道者を描き出した。そこに利他的な教育者の要素が入り込む余地は全く無い。ダンヌンツィオの理想の人間観とは、自らを厳しく律して、尊敬すべき相手と対等の関係を結ぶことである。

第6章 パスコリ『最後の旅』の幻滅と悲哀

パスコリが描いた最も重要なオデュッセウス像は、1904年の『饗宴詩篇集』に初出の『最後の旅 (L'ultimo viaggio)』である。『オデュッセイア』と同じ24の節に分かれ、各節は35～58詩行（各11音節）によって構成される。パスコリは『オデュッセイア』第11巻90-137行のテイレシアースの予言に基づいて、オデュッセウスがイタケーに帰国した後の、原作にはない旅を創作する。

テイレシアースの予言の概要は次の通り。オデュッセウスは求婚者たちを誅殺した後、櫂を手に取り、海を知らない人たちが住む国まで旅をせねばならない。その国の人は船を知らず、櫂を見て麦打ちの竿と言うだろう。その時、櫂を地面に突き刺し、海神ポセイドーオンに生贄を捧げねばならない。そして祖国に戻り、神々全てに生贄を捧げねばならない。その後、安らかな死が海からやって来るだろう。

『最後の旅』の第1～2節は、原作のテイレシアースの予言を忠実になぞる。オデュッセウスが櫂を持って陸地を旅していると、見知らぬ人から、もう麦打ちが終わったので竿は役に立たないと言われる。それに対してオデュッセウスは、「翼 (ala) だ！ 竿 (pala) ではない！」(PC: 107) と答える。そして何者かという問いに対して、鳥の翼のように櫂を動かして、空の色を映す広大な海の上を進む人々が暮らす国から来たと答える。その後、ポセイドーオンに生贄を捧げ、祖国へ戻る。

第3～4節は、ヘーシオドス『仕事と日』383-694行の「農事暦」を下敷きにしている⁹⁾。秋に南へ渡る鶴の歌が、空の上からオデュッセウスに届き、冬支度をするように命じる。翼を櫂のように動かして飛びながら、船乗りには「眠れ」と、農夫には「耕せ」と、そしてオデュッセウスには「海ではなく畑を耕す時だ」(PC: 115) と歌う。

第5節では、地面に突き刺された櫂のように、寂しく老いるオデュッセウスが描かれる。9年間、彼は家に留まっていたが、まだ死は海から訪れない。家での饗宴は稀になり、それを盛り上げる吟唱詩人ペーミオスも、それを荒らす乞食イーロスも、オデュッセウスの家を忘れてしまった。

第6～7節で、オデュッセウスは再び旅に出たいという思いを募らせる。炉端で妻と差し向

かいに座りながら、黒い酒壺に反射する火の粉を見て、星が頼りの夜の航海を夢想する。妻が糸を紡ぐ音は、船のロープが風を切る音になる。燃える焚き木の音は、カリュプソーの島で彼が作った筏がきしむ音になる。

第8節で、10年目の春となり、海から燕が訪れる。眠るオデュッセウスは、船員たちが海で話をするのを夢に見る。目覚めてもそれが聞こえるのは、実は燕の鳴き声だったからである。オデュッセウスは妻を残して寝台から抜け出し、海へ向かう。

以上、第1～8節は、テイレシアースの予言に従って、海ではなく陸の生活をしようとするオデュッセウスが、やはり海へ戻ろうと決心するまでの経緯である。第1～4節では、イタリア語の音の響き（ala と pala）や、巧妙な比喩（櫂を漕ぐ、翼を羽ばたく、畑を耕すの類比）によって、パスコリ独自の世界が作り出される。第5節の地面に刺された櫂の比喩は、テイレシアースの予言に対する一つの解釈である。第6～8節の現実と夢の交錯からは、オデュッセウスの欲求の強さが分かる。夢を実現したいという強迫観念に取り付かれた冒険者という人物像は、ダンテ以来の典型的なもので、ダンヌンツィオのオデュッセウスも同じである。

続く第9～12節では、オデュッセウスの出船までが描かれる。海岸に出たオデュッセウスは、波打ち際で砂を掘る粗末な身なりの老人と出会う。オデュッセウスは自分の素姓を隠しながら、イタケーの王としての自分の徳を讃える。老人は海を見たまま、巻貝を耳に当てて音を聞こうとする。相手がオデュッセウスだと知っていた老人は、次のように語る。

お前に私は歌っていた。お前はワインを飲みながら、／静かに聞いていた。しかしお前は、事実よりも小さい言葉が／気に入らなくなった。今では私は一人静かに／歌を聞くだけだ。私は琴を捨てたのだ。／ […] ／今それを爪弾くのは誰か？ それは風だ。(PC: 133)

オデュッセウスは老人がパーミオスだと気づき、返事をする。

私はオデュッセウスの武勲に聞き飽きていた。／人生とは、それを生きてしまうと、眠りのようだ。／眠りに過ぎない。「全」でないものは「無」だから。／ […] 今、私は眠りの中に再び飛び込みたい、／あの夢を忘却の底で見付けるために。／私に付いて来い。(PC: 134)

小さな貝の中の歌で満足しているパーミオスを、オデュッセウスは「本物の海はもっと大きいぞ！」(PC: 135) と言って、連れて行く。浜には小さな黒い船があり、出発の準備ができている。集まった白髪の下部たちにオデュッセウスが、「私も炉の煙ではなく雲が欲しい。／糸を紡ぐ音ではなく風が欲しい。／音を立てる炉の憎らしい火ではなく、／輝き歌う海と空が欲しい

い」(PC: 139-40)と演説をして、出船する。

以上、第9～12節で描かれるのは、虚構に飽き足らず、現実には執着するオデュッセウスの姿である。「事実よりも小さい言葉」とは、オデュッセウスの冒険を歌う詩のことであり、いかにペーミオスのような名人がそれを歌おうとも、虚構は現実に及ばないのである。詩という人間の営みの無力さを知ったペーミオスは、永遠の「風」という自然に琴を委ねる。一方、オデュッセウスも人生が儂い「眠り」だということを十分に理解している。しかし、それでも彼は流れゆく現在の瞬間の中で、雲や風や海や空などの大きな自然を実感するために、「眠りの中に再び飛び込みたい」のである。ダンテやダンヌンツィオのオデュッセウスと同類の、知に貪欲な人物像である。

第13節以降の後半では、老いたオデュッセウスの様々な冒険が描かれる。海に漕ぎ出した船の上で、ペーミオスが琴を手に取り、奏で始めると、老いた漕ぎ手たちの心の中に歌が蘇る。歌う彼らの歌は、「遠い昔の、幼い (fanciullo) もの」(PC: 145)だった。船倉には乞食のイーロスが眠っていた。惨めな彼だが、老いという点ではオデュッセウスと同じである。目を覚まし、出航したことを知って嘆く彼を、オデュッセウスは、「耐えろ。ここには屋根とベッド、大麦とワインがある」(PC: 148)と励ます。(第13～14節)

10日目に嵐となり、それが9日間続いた後、ある島に到着する。キルケーの島に着いたと信じるオデュッセウスは、疲れていても眠らずに、「ペーミオスよ、寝ているのか？ 聞け！／忘れていた甘い夢を、いま私は再び夢見ている！」(PC: 151)と言う。夜が明け、ペーミオスと共に、キルケーの家を探しに行く。しかし見付からず、夜になり、落ち葉を被って横になる。眠らないオデュッセウスは心の中で、眠らないキルケーの声と機織の音を聞く。夜が明け、二人は手分けしてキルケーを探す。しかし、オデュッセウスに聞こえるのは、櫂の木の葉音と潮騒だけである。そして、ペーミオスが死んでいるのを見付ける。櫂の木の枝に掛けられた琴が、風に吹かれて鳴り、英雄は泣く。(第15～17節)

その後、オデュッセウスたちはキュクロペスの島へ行く。人食いの巨人ポリュペーモスに対して才知で勝利したことを思い出したオデュッセウスは、「ペーミオスよ、／忘れていた甘い夢、それを私は再び夢見ている。／大勝利だった…」(PC: 159)と、死んだペーミオスに話しかける。オデュッセウスは一人でポリュペーモスの洞窟へ行こうとするが、チーズや子羊を盗みたいイーロスが付いて来る。洞窟にいたのは、赤子に乳をやる女だけで、しばらくして放牧から帰っていた男も、巨人ではなく普通の人間だった。オデュッセウスは、山頂から岩を投げる一つ目の巨人について尋ねたが、彼らが知っていたのは光る目のような火口から岩を降らせた火山の話だけだった。イーロスは住み心地が良さそうなこの島に、使用人として住むことを申し出る。(第18～20節)

オデュッセウスたちは航海を続ける。二人のセイレーネスのことを思い出したオデュッセウスは部下たちに、「私はそれを、船の上に立って、／引き留める綱に縛られず、自由に聞きた

い！／［…］／そして地上で起こる全てのことを、／二人のセイレーネスの口から知りたい」（PC: 171）と言う。この言葉に奮起した部下たちは懼を漕ぐが、彼らが知りたいことは隣人の収穫や妻の仕事振りだった。彼らは、ロートパゴイ族の島、ライストリュゴネス族の島、死者の島、太陽神ヘーリオスの島、風の王アイオロスの島、海の魔物スキュレとカリュプデイスを通り過ぎて、二人のセイレーネスの近くへ来る。海流が船をセイレーネスの方に運ぶが、歌は聞こえない。そこでオデュッセウスが次のように叫ぶ。

私に分かるか！ 知るために私が戻って来たぞ！／お前たちが私を見るように、私は多くを見た。／しかし、私が世界で見た全ては、／逆に私を見て、私に問いかける。私は誰なのか？／［…］／どうか私に真実を教えてくれ。全ての中から、ただ一つの真実を私に。／私が死ぬ前に。そのために私は生きて来た！（PC: 177-8）

速く甘美な海流が船を先へ進める。船の前には、顔を高く上げ、じっと目を見開いた二人のセイレーネスが屹立する。オデュッセウスは、「もう私には一瞬しか残されていない。お願いだ！／今の私が何者で、かつての私が何者だったのか、せめて教えてくれ！」（PC: 178）と叫び、船は二つの岩礁の間で砕け散った。（第21～23節）

オデュッセウスは海に9日間流され、カリュプソーの島に着く。女神が与えた永遠の服を涙で濡らした男、不滅の若さを望まなかった男が、波打ち際に横たわって死んでいる。カリュプソーは自分の豊かな髪でオデュッセウスを包み、誰一人聞く人のいない不毛の波に向かって、「生まれるな！ 生まれるな！ もともと存在しない方が、／死んでいなくなるより辛い！」（PC: 181）と呻吟した。（第24節）

第13～23節における最後の冒険で、オデュッセウスは幾つもの幻滅を味わった末に破滅する。この神話の終焉をパスコリは、近代的な科学的根拠（ポリュペーモス＝火山、セイレーネス＝海流と岩礁）に基づいて描き出す。また、吟唱詩人ペーミオスと乞食イーロスとの別れは、近代において、オデュッセウスの英雄的な略奪者という前近代的な人物像が、芸術的そして経済的に不適であることを示している。そして、最終節のカリュプソーの嘆きは、古代の驚異に満ちた冒険が、近代文明の過剰な知識によって失われてしまったことに対するものである。

1904年8月半ばにパスコリから『饗宴詩篇集』を贈られたダンヌンツィオは、9月7日にパスコリに礼状を贈る。

他のいかなる詩集からも、これほどの陶醉を得た記憶がない。オデュッセウスの子の心は、『最後の旅』を前にして震え続けている。かつて人間の憂鬱の淵が、これほど深く口を開いたことがあっただろうか？ ここでは、涙がこの上ない不動の水晶と化し、それを通して瞳は遙か彼方を見る。想像の世界の越えることができそうにない幾つかの限界を、

君は打ち破ることができる。(CPD: 155)

この言葉は決して表面的な讃辞ではない。その証拠に、ダンヌンツィオの1906年の悲劇『愛よりも (*Più che l'amore*)』の、「オデュッセウスの子」と呼ばれる主人公は、『最後の旅』のオデュッセウスと非常に似ている¹⁰⁾。ダンヌンツィオの楽観主義とパスコリの悲観主義の対比は、序で引用したStanfordとBoitaniの言葉からも明らかだが、二人の詩人は深い部分で繋がっていたのである。

結

本稿では、ダンヌンツィオとパスコリのオデュッセウス像を、詩人と教育者の立場の違いという視点から考察した。ダンヌンツィオは、飽くなき探求心を抱く冒険者としてオデュッセウスを描き、自己を同一化する。この理想像は、詩人の立場でも教育者の立場でも同じである。一方、パスコリは詩人として外側から、オデュッセウスの神話の喪失を悲壮に描く。しかし、教育者としては、若者の人生に対する意欲を損壊するような悲劇には触れず、オデュッセウスの純粋な詩情だけを強調する。

ダンヌンツィオは自分が教育者に向いていないことを自覚していた。ボローニャ大学イタリア文学講座の教授カルドゥッチの後継者が話題となっていた1904年12月30日、ダンヌンツィオはパスコリへ、「君以上の適任者は誰もいない、私の優れた兄弟よ。私は自分の戦いの中にとどまる」(CPD: 157)という電報を送る。また、1905年6月10日にも、「ボローニャ大学教授の任命を知ったところだ。私の願いが叶い、そして榮譽ある講座に最適者が就いて、私は幸せだ。犬たちには吠えさせておいて、君は自分の不可侵の仕事を平穩に続ければ良い」(CPD: 158)という電報を送る。更にパスコリの死後、その後任としてダンヌンツィオの名前が挙がった時には、「名譽は大きいが、私の自由への愛はそれよりも大きい」(Ric.: 3723)と言って、断った。

一方、パスコリは教育者としての自覚を強く持っていた。1907年2月24日、『マルゾッコ』誌に発表した『最後の授業 (*L'ultima lezione*)』で、パスコリは14年振りに受けた、最後となるカルドゥッチの授業(1896年1月25日)を振り返る。授業の内容は、ダンテのオデュッセウスの最後の旅だった。その中で、パスコリは師であるカルドゥッチの言葉、「常に人生において重んずべきこと…それは外見よりも内容、快樂よりも義務。…高みを目指すこと…これを私は君たちに常に教え込んできた…」(PD: 335)を思い出す。そして、この言葉が教室の中ではなく、詩の中のオデュッセウスの口から発せられたのではないかと、読者に問いかける。パスコリは、正しい詩と教育の一致という理想を夢見ていたのである。

注

- 1 両詩人は時代精神の担い手として、広い意味で国民的な教育者である。ただ、それを生活のための職業とするか否かは、それまでの人生観に基づく選択であり、その後の人生観を変化させる条件と考えられる。パスコリは1894年9月のオイエットィとの対談の中で、「私は社会主義者だ。武闘派に属していた。その後、そういう方面に私は力を入れなくなった。当然のことだ。知っての通り、私は教師であり、食べるために自分の義務を果たす必要がある」(Ojetti 1899: 143-4)と述べる。
- 2 Cfr. *CPD*: 15.
- 3 内田 (2012: 27-47) 参照。
- 4 Cfr. *Hom*: 162-3.
- 5 Cfr. Cervetti 2012, Paradisi 2011. 一方、ダンヌンツィオは職業として教師をしたことがない。高校卒業後、大学に入学はするものの、すぐにジャーナリストとして社交界消息や文芸批評を書きながら、創作活動を行った。最近の評伝には、「ローマが彼を待っている。本来ならば、大学が彼を待っていると言うべきところである。文哲学部で彼を見かけるのは極めて稀なこととなるだろう。[...]ギリシアやイタリアの文学よりも関心を抱いていた生理学の授業に時々出席することはあるが、試験の形跡は一切ない。2年間だけ授業料を払ったということは確かに分かっている」(Guerri 2009: 34)と書かれている。
- 6 パスコリの社会主義について、評伝を書いた妹のマリーアは次のように述べる。「しかしジョヴァンニ・ニコロ [=パスコリ] は、コスタや結社の他の人々と違って、インターナショナル主義者ではなく、共産主義者でもなかった。単純に社会主義者だった。彼の社会主義は、当時も、その後もずっと、もっぱら国家的な性格のものだった。[...] キリスト教的社会主義と呼ぶこともできただろう。なぜなら、彼の考えによると、真正な社会主義とキリスト教との間に乗り越え難い差異はなく、[...] キリストが最初の最も偉大な社会主義者であったことが聖書にはっきりと示されているからである。」(Pascoli 1961: 63)
- 7 旅の前後にダンヌンツィオは、ルコント・ド・リール訳の『オデュッセイア』や古典版ホメロスの購入を、同行者エレル (ダンヌンツィオの作品の仏訳者) に依頼した。Cfr. *CDH*: 333, 338.
- 8 Cfr. Braccesi 2011: 90-1.
- 9 Cfr. *Hes*: 57-90.
- 10 内田 (2009: 119-35) 参照。

文献一覧

【テキスト】

Dante Alighieri

Inf. *La Divina Commedia. Inferno*, a cura di N. Sapegno, Firenze, La Nuova Italia, 1987.

Gabriele D'Annunzio

CDH *Carteggio D'Annunzio-Hérelle (1891-1931)*, a cura di Mario Cimini, Lanciano, Rocco Carabba, 2004.

Maia *Maia*, edizione critica a cura di C. Montagnani, Milano, Il Vittoriale degli Italiani, 2006.

Ric. *Prose di ricerca*, a cura di A. Andreoli e G. Zanetti, Milano, Mondadori, 2005.

SG I *Scritti giornalistici 1882-1888*, vol. I, a cura di A. Andreoli, Milano, Mondadori, 1996.

SG II *Scritti giornalistici 1889-1938*, vol. II, a cura di A. Andreoli, Milano, Mondadori, 2003.

VI *Versi d'Amore e di Gloria*, vol. I, a cura di A. Andreoli e N. Lorenzini, Milano, Mondadori, 2001.

Giovanni Pascoli

CPD *Carteggio Pascoli-D'Annunzio*, a cura di E. Torchio, Bologna, Pàtron, 2008.

Myr. *Myricae*, a cura di P. V. Mengaldo, Milano, BUR, 1998.

PPS *Poesie e prose scelte*, a cura di C. Garboli, Milano, Mondadori, 2002.

PC *Poemi conviviali*, a cura di M. Belponer, Milano, BUR, 2010.

- PD* *Prose disperse*, a cura di G. Capecchi, Lanciano, Rocco Carabba, 2004.
 ヘーシオドス
Hes 『仕事と日』, 松平千秋訳, 岩波文庫, 2001。
 ホメーロス
Hom 『オデュッセイア』, 松平千秋訳, 『世界文学全集』第1巻, 講談社, 1982。

【参考文献】

- Boitani P.
 1992 *L'ombra di Ulisse*, Bologna, Il Mulino.
 Braccesi L.
 2011 *Archeologia e Poesia 1861-1911. Carducci - Pascoli - d'Annunzio*, Roma, «L'Erma» di Bretschneider.
 Cervetti V. (a cura di)
 2012 *Giovanni Pascoli 1855-1912. Vita, immagini, ritratti*, Parma, Graphiche Step.
 Guerri G. B.
 2009 *D'Annunzio. L'amante guerriero*, Milano, Mondadori.
 Ojetti U.
 1899 *Alla scoperta dei letterati*, Milano, Fratelli Bocca.
 Paradisi P.
 2011 *Pascoli professore. Trent'anni di magistero*, in *Pascoli. Poesia e biografia*, a cura di E. Graziosi, Modena, Mucchi, 259-327.
 Pascoli M.
 1961 *Lungo la vita di Giovanni Pascoli*, Milano, Mondadori.
 Stanford W. B.
 1968 *The Ulysses Theme*, Oxford, Basil Blackwell.
 内田健一
 2009 「ブルジョア社会における英雄の悲劇—ダンヌンツィオ『愛よりも』の「新しいエリニユス」の解釈—」, 『イタリア学会誌』, LIX, 119-135。
 2012 「イタリアの退廃主義文学における子供の意味—パスコリ, コンティ, ダンヌンツィオの比較を通じて—」, 『イタリア学会誌』, LXII, 27-47。

The images of Ulysses in D'Annunzio and Pascoli and the difference of standpoints: Poet or educator

Kenichi UCHIDA

Abstract

Introduction: In *Contemplazione della morte* (1912), D'Annunzio looked back on his relationship with Pascoli, who had just passed away. One of their common interests was Ulysses, the hero of Greek mythology. However, their standpoints were different, as D'Annunzio was a pure poet and Pascoli a poet-educator.

Chap. 1: Their solidarity as poets grew gradually into a friendship by virtue of D'Annunzio's respect for Pascoli. Despite their opposite personalities, they were bound together by their passion for classical literature.

Chap. 2: In *Il sonno di Odisseo* (1899), Pascoli expressed through "sleep" the vanishing of the mythological figure of Ulysses and through "dream" an affection for homeland and family.

Chap. 3: In the "Introduction" of the scholastic anthology *Sul limitare* (1899), Pascoli talked of his zeal for education and his socialistic sympathy for unfortunates. In his "Note for pupils" he tried to convey, by emphasizing the tears of Ulysses, pure sentiments to the young, such as homesickness or faithfulness.

Chap. 4: In the funeral oration for the opera composer Verdi (1901), D'Annunzio showed his elitist and nationalistic concept of education. Comparing Verdi in his later years to the old Ulysses in Dante's *Divine Comedy*, he implanted capitalistic competitiveness into students.

Chap. 5: In the poem *Maia* (1903), D'Annunzio intensified the egoism of the hero and presented a noble figure of a solitary ascetic. This was completely alien to the altruism of educators.

Chap. 6: In the poem *L'ultimo viaggio* (1904), Pascoli sorrowfully described an obsessive Ulysses who was brought to ruin after experiencing various disillusionments. D'Annunzio praised this work, from which he received inspiration for writing a similar tragedy, *Più che l'amore* (1906).

Conclusion: D'Annunzio identified himself with his Ulysses as an eternal adventurer. This ideal figure was the same, whether from the standpoint of a poet or from that of an educator. On the other hand, Pascoli sang a song of the pathetic end of the Ulyssean myth. But as educator, he emphasized only the poetic purity without touching on its tragic fate. In the essay *L'ultima lezione* (1907), Pascoli, who unlike D'Annunzio was conscious of being an educator, looked back to Carducci's last lesson, which had as its theme the Dantesque Ulysses, and yearned for harmony between poetry and education.

Keywords: *Odyssey*, adaptation, Italian literature, poetry, education